貝塚市埋蔵文化財調査報告　第73集

三ツ松北垣外遺跡発掘調査概要

2007.9.30

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は、大阪府の南部、泉州地域に位置し、北は岸和田市、南は熊取町・泉佐野市と隣接しています。西は大阪湾に面し、東に和泉葛城山を望む風光明媚な地であります。

今日、私たちを取り巻く社会や自然の環境は、急速な開発で大きく変貌を遂げつつあります。こうした開発が進む一方で、先人によって育まれた文化の痕跡である埋蔵文化財が失われています。このような埋蔵文化財を発掘調査によって文化の痕跡を記録することにより、その歴史を明らかにする一方で、私たちの日常生活が先人によって培われた文化の賜物であることを認識し、これからの発展の礎とするために未来へ引き継いでいく必要があります。

今回発掘調査を実施しました三ツ松北垣外遺跡は、森、三ツ松を結ぶ水間街道が通る場所に位置する遺跡で、中世の集落跡として周知されておりましたが、平安時代後期の黒色土器が出土し、さらに時代が遡ることがわかりました。このような成果を本調査報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

発掘調査ならびに本書の作成にあたり、多大なご指導、ご協力を賜りました関係各位に対し、深謝するともに、今後とも本市埋蔵文化財保護行政に対する一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成19年9月30日

貝塚市教育委員会
教育長　山本　太三郎

例　　言

1．本書は、社会福祉法人　貝塚誠心園　理事長　横井清氏の依頼により、貝塚市三ツ松 869 － 1、870 － 1 に所在する三ツ松北垣外遺跡において実施した、民間開発工事に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は確認調査を平成 15 年 12 月 22 日～ 12 月 24 日、２次発掘調査を平成 17 年 11 月 1 日より平成 18 年 1 月 27 日にかけて実施した。なお、内業調査については本書刊行をもって終了した。

3．調査にあたっては、社会福祉法人　貝塚誠心園　理事長　横井清氏に多大な御理解と御協力を得た。ここに記して、感謝の意を表します。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課、学芸員三浦　基が担当した。

5．本書の執筆・編集は三浦が行った。

6．遺物写真撮影は三浦が行った。

7．出土遺物、調査記録は、貝塚市教育委員会において保管している。

凡　　例

1．調査地位置図は縮尺 1 /2,500、方位は座標北を上に統一している。また、調査区位置図の方位は磁北を示す。

2．本書で用いた標高は、東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

3．本書の土色表示は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帳』1990 年度版を用いた。

目　　次

はじめに

例　　言、凡　　例

目　　次（本文目次、挿図目次、図版目次）

第１章　調査に至る経過……1

第２章　位置と環境　……3

第３章　調査結果　……4

１．調査の概要　……4

２．基本層序　……4

３．検出遺構　……4

４．出土遺物　……8

第４章　まとめ　……9

図版目次

図版１　検出遺構
写真１　調査地全景

図版２　検出遺構
写真２・３・５　溝１　　写真６・７　調査区南側　　写真８　溝７、鋤溝群１　　写真９　調査区西側

図版３　検出遺構
写真 10・11・13　溝４～６　　写真 12・14　溝３、段差３

図版４　検出遺構
写真 15・16　段差２　　写真 17 ～ 20　段差３　　写真 21・22　鋤溝群２

図版５　出土遺物
遺物包含層第４層出土土器

図版６　出土遺物
遺物包含層第５層（21）、遺物包含層第４層（15、17、19、20）出土黒色土器

図版７　出土遺物
遺物包含層第４層（23、24、27 ～ 29、31、32、34）、遺物包含層第３層（37）出土土器

図版８　出土遺物
遺物包含層第５層（41）、遺物包含層第４層（38、42、44 ～ 47）、遺物包含層第３層（48）出土遺物

挿図目次

図１　貝塚市位置図

図２　貝塚市遺跡分布図（部分）

図３　調査地位置図

図４　調査区地区割図、柱状土層図

図５　遺構配置図（第６層上面）

図６　遺構配置図（第５層上面）

図７　出土遺物

第１章　調査に至る経過

貝塚市三ツ松 869 － 1、870 － 1における高齢者福祉施設建設工事にあたり平成 15 年 12 月 4 日埋蔵文化財発掘届出書が提出された。当該地は中世の集落跡として周知されている三ツ松北垣外遺跡の範囲内にあたる。

確認調査は、平成 15 年 12 月 22 日～ 12 月 24 日にかけて市教育委員会が実施した。

調査は建物建設予定部分に第１区～第３区（合計 54.5㎡）の調査区を設定し、実施した。

確認調査の結果、平安時代から中世と考えられる遺物包含層、耕作に伴うアゼの痕跡、溝１条、中世の耕作に伴う溝２条を検出した。確認調査実施後、約２年が経過し工事を実施するにあたり協議を重ねた結果、基礎掘削により破壊を受ける部分（約 1,210㎡）の発掘調査を実施することで合意し、平成 17 年 10 月 14 日に覚書を交わした。

調査期間は平成 17 年 11 月 1 日より平成 18 年 1 月 27 日にかけて実施し、最終的な調査面積は 1,034㎡となった。

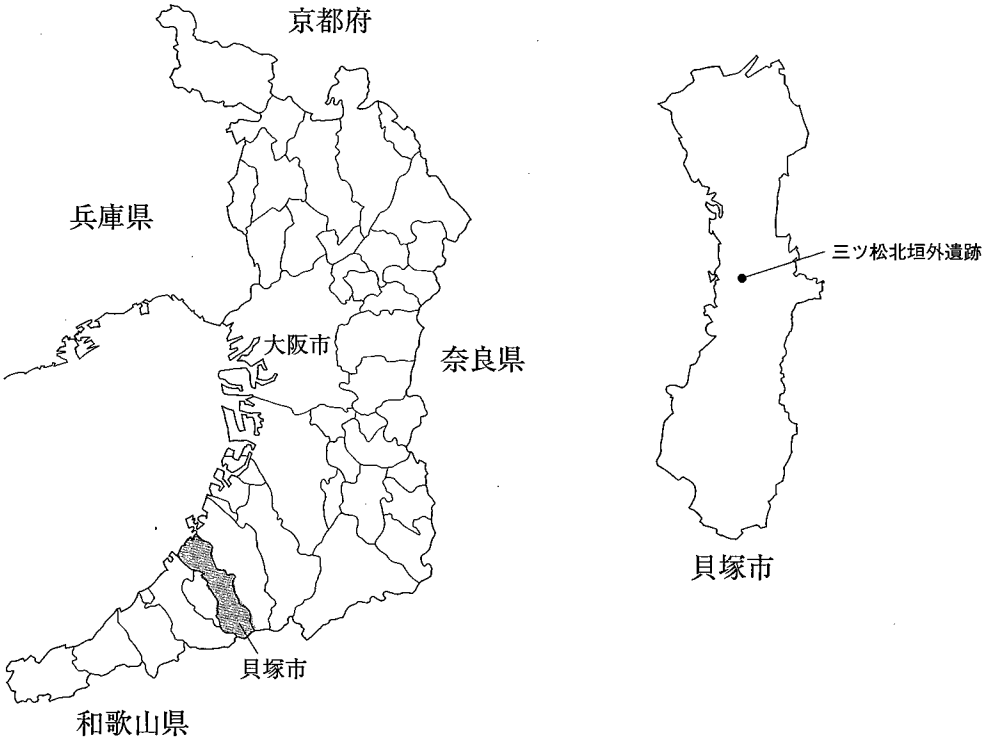
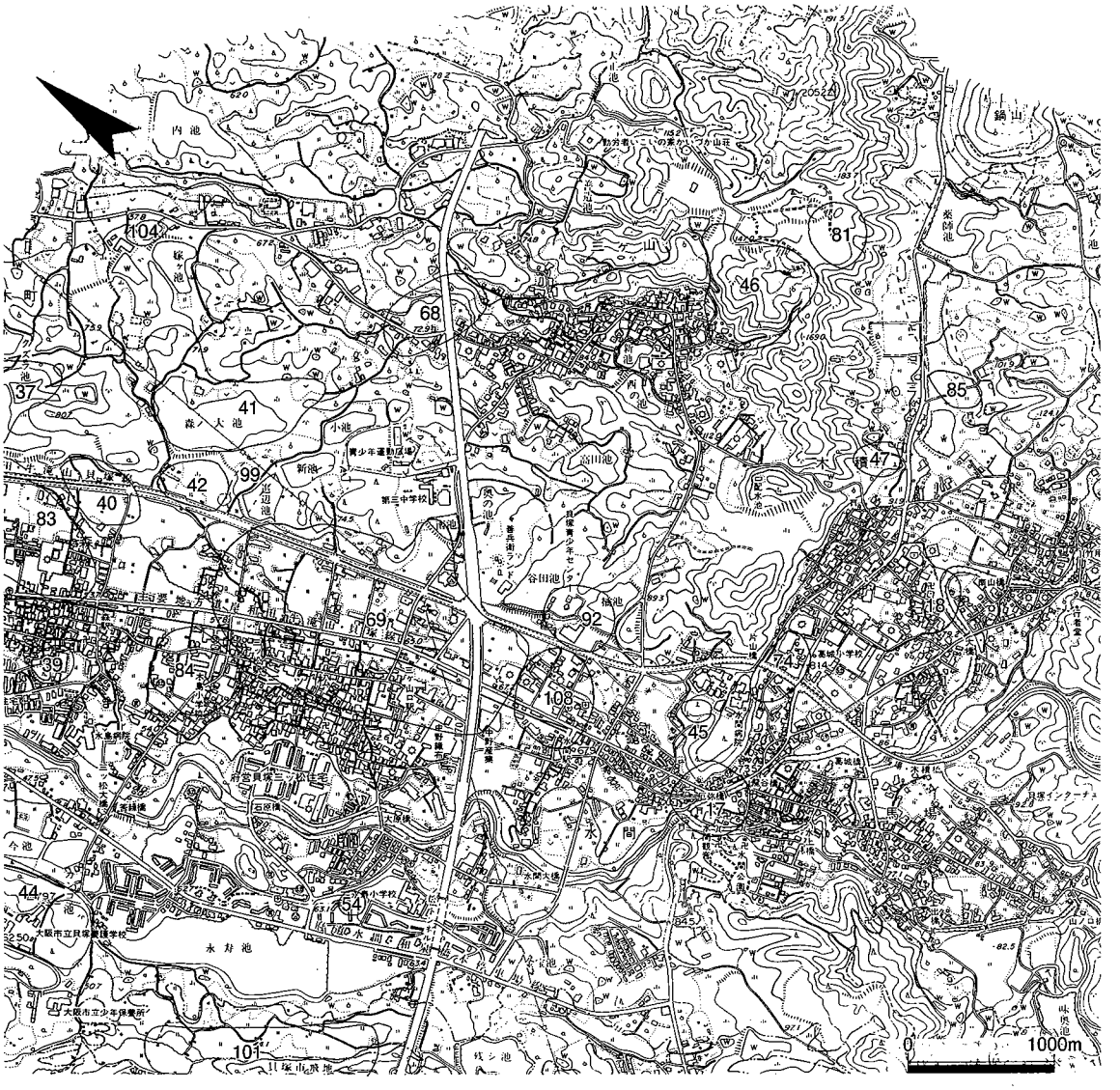


図１　貝塚市位置図



17 水間寺遺跡　18 木積観音寺跡　35 積善寺城跡　36 清児遺跡　37 集原池遺跡　38 高井天神廃寺・高井城跡　39 森城跡　40 森Ｂ遺跡　41 森ノ大池遺跡　42 森Ａ遺跡　44 千石堀城跡　45 水間墓地　46 三ケ山城跡　47 片山墓地　54 三ツ松遺跡　68 三ケ山遺跡　69 三ケ山西遺跡　74　木積遺跡　81 三ヶ山オニ谷遺跡　83 森下代遺跡　84 三ツ松北垣外遺跡　85 薬師池西遺跡　101 白地谷遺跡　108 水間二ノ戸遺跡

図２　貝塚市遺跡分布図（部分）

第２章　位置と環境

三ツ松北垣外遺跡は貝塚市のほぼ中央部、大字「三ツ松」に所在し、近木川右岸の段丘上に位置する中世の集落跡である。現状 T.P.54 ～ 55 m である。東山丘陵から近木川方向に数多くの開析谷が伸び、谷をせき止め、ため池を造り農業用水として利用されている。本遺跡南には観音信仰で知られる水間寺があり、本調査地は水間街道に面している。

周辺の遺跡としては北に奈良時代～平安時代の散布地である清児遺跡、中世の散布地である名越遺跡、古墳時代～近世の集落跡である名越西遺跡、中世の集落跡である鳥の池西遺跡、北東には飛鳥時代、奈良時代の須恵器窯が推定されている集原池遺跡、中世、近世の散布地である森Ａ遺跡、中世の散布地である森Ｂ遺跡、平安、中世の散布地である森ノ大池遺跡、南には、中世の散布地であり、近年の調査で縄文土器、石器が出土している三ヶ山西遺跡と多くの遺跡が存在する。

これらの遺跡のほか、中世末期に紀州根来寺の勢力下となって多くの城が築かれた。本遺跡周辺では、北に高井城跡、積善寺城跡、森城跡、南東に三ケ山城跡、近木川を挟んで北西に千石堀城跡など多くの城跡が残る。

図３　調査位置図（S=1/2500、上が座標北）

第３章　調査結果

１. 調査の概要

調査は、建設工事により破壊を受ける部分、約 1,210㎡について調査区を設定して実施した。調査を進めるにあたって、土置場がなく、掘削土を搬出する必要があった。搬出するには重機、トラックの作業スペースを確保する必要があり、調査面積は最終的に 1,034㎡となった。調査区は国家座標に基づいて５ｍ×５ｍの区画を用い、南北に 11 区画を設け１～11、東西に９区画を設けＡ～Ｉとした。

２. 基本層序

調査区の地層堆積状況は、上層より第１層（1 耕作土、層厚 0.2 ｍ）、第２層（2、3、4）、2 灰黄色砂質土（層厚 0.08 ～ 0.14 ｍ）、3 明黄褐色土（層厚 0.1 ～ 0.16 ｍ）、4 灰黄褐色土（層厚 0.1 ～ 0.14 ｍ）、第３層（7、9）、7 暗灰黄色細砂混じり土（層厚 0.08 ～ 0.14 ｍ）、9 暗灰黄色細砂（2.5Y5/2）・にぶい黄色砂（2.5Y6/4）混じり土（層厚 0.14 ～ 0.2 ｍ）、第４層（8、10、11、12）、8 にぶい黄色砂混じり土（層厚 0.05 ～ 0.16 ｍ）、10 暗灰黄色細砂混じり土（層厚 0.07 ｍ）、11 にぶい黄褐色砂質土（層厚 0.1 ｍ）、12 灰黄褐色土（層厚 0.1 ｍ）、第５層（5 褐色土、層厚 0.03 ～ 0.08 ｍ）、第６層（6 灰黄褐色土、層厚 0.1 ～ 0.14 ｍ）でその下は明黄褐色粘質土（13）、黄褐色土（14）、灰黄褐色礫混じり土（15）の地山土である。

第 1、第２層は農地層、第３層～第５層は遺物包含層である。第３層からは土師器、瓦器が出土しており、中世と考えられる。第４層、第５層からは黒色土器、青磁、土師器、瓦器が出土しており、平安時代後期～中世と考えられる。遺構検出は第５層上面、第６層上面で実施した。

３. 検出遺構

本調査地は北側部分に段差があり、２区画の土地であった。調査の結果西側の道路部分から２ヵ所の段差があり、数度の地形改変が行われ、現在の土地区画となったことが明らかとなった。遺構検出は遺物包含層第５層上面、第６層上面で実施し、耕作に伴う溝、鋤溝を検出した。

第６層上面

溝１

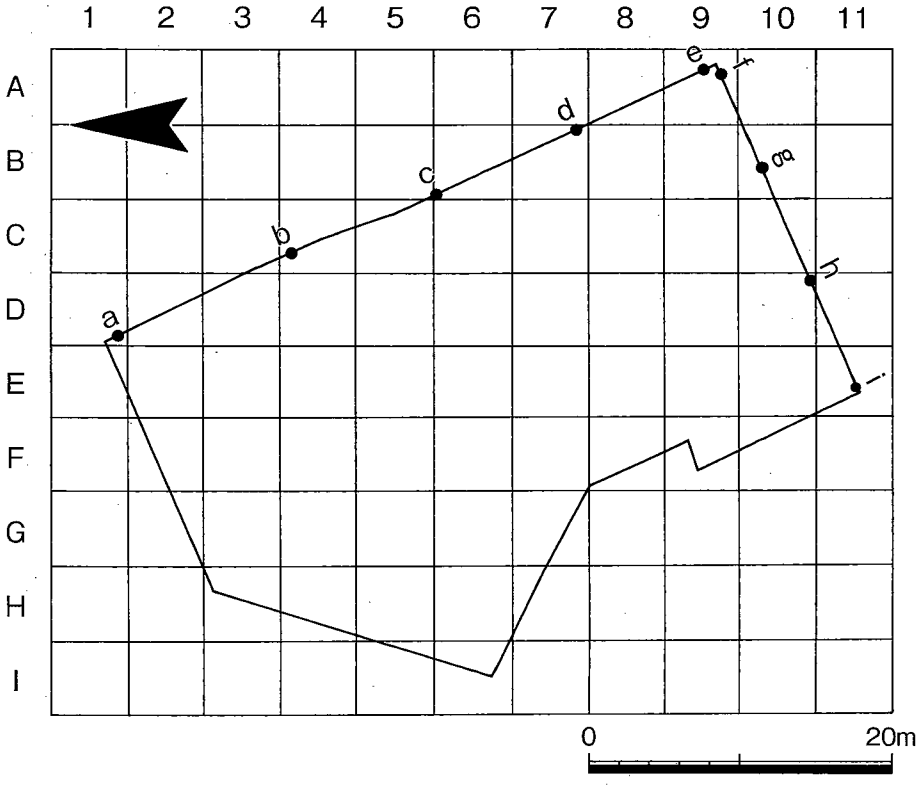
本溝は、B･C-6 区にて検出した。幅 0.7 ｍ、検出長３ｍ、深さ 0.05 ｍである。埋土はにぶい黄色砂混じり土(2.5Y6/4)で耕作に伴う溝と考えられ、北側の段差１、溝２との間隔はほぼ同じで約 11 ｍの間隔であり、耕作の区画溝の可能性がある。遺物は出土していないが、地層堆積状況等から判断して中世に掘削された溝と考えられる。

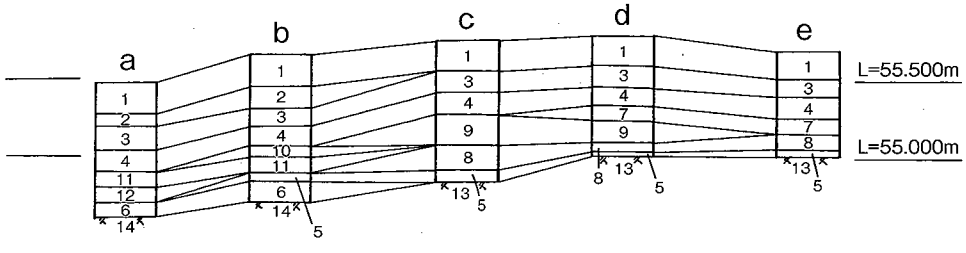
溝２

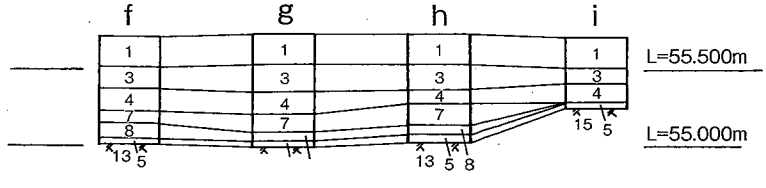
本溝は、A-8、B-8･9、C-9 区にて検出した。幅 0.9 ～ 1.8 ｍ、検出長 11.6 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.08 ｍである。埋土はにぶい黄色砂混じり土 (2.5Y6/4) で耕作に伴う溝と考えられ、溝１と同様に耕作地の区画溝の可能性がある。遺物は出土していなが、地層堆積状況等から判断して中世に掘削された溝と考えられる。

段差１

本遺構は C-4、D-4･5、E-5、F-5 区にて検出した。検出長 15 ｍである。段差の北側は約 0.1 ｍ低くなっており耕作に伴う区画あるいは地形改変の際に段差が設けられたと考えられる。上層で溝７を検出しており、段差がつくられた後も、区画が使用されたと考えられる。遺物は出土していないが、地層堆積状況等から判断して中世に掘削されたと考えられる。







1：耕作土
2：灰黄色砂質土（2.5Y/2）
3：明黄褐色土（10YR6/6）
4：灰黄褐色土（10YR5/2）
5：褐色土（10YR4/4）
6：灰黄褐色土（10YR4/2）
7：暗灰黄色細砂混じり土（2.5YR5/2）
8：にぶい黄色砂混じり土（2.5Y6/4）
9：暗灰黄色細土（2.5Y5/2）、にぶい黄色砂（2.5Y6/4）混じり土
10：暗灰黄色細砂混じり土（2.5Y5/2）
11：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）
12：灰黄褐色土（10YR5/2）
13：明黄褐色粘質土（10YR6/2）　地山土
14：黄褐色土（2.5Y5/4）　地山土
15：灰黄褐色礫混じり土（10YR4/2）　地山土

図４　調査区地区割図、柱状土層図

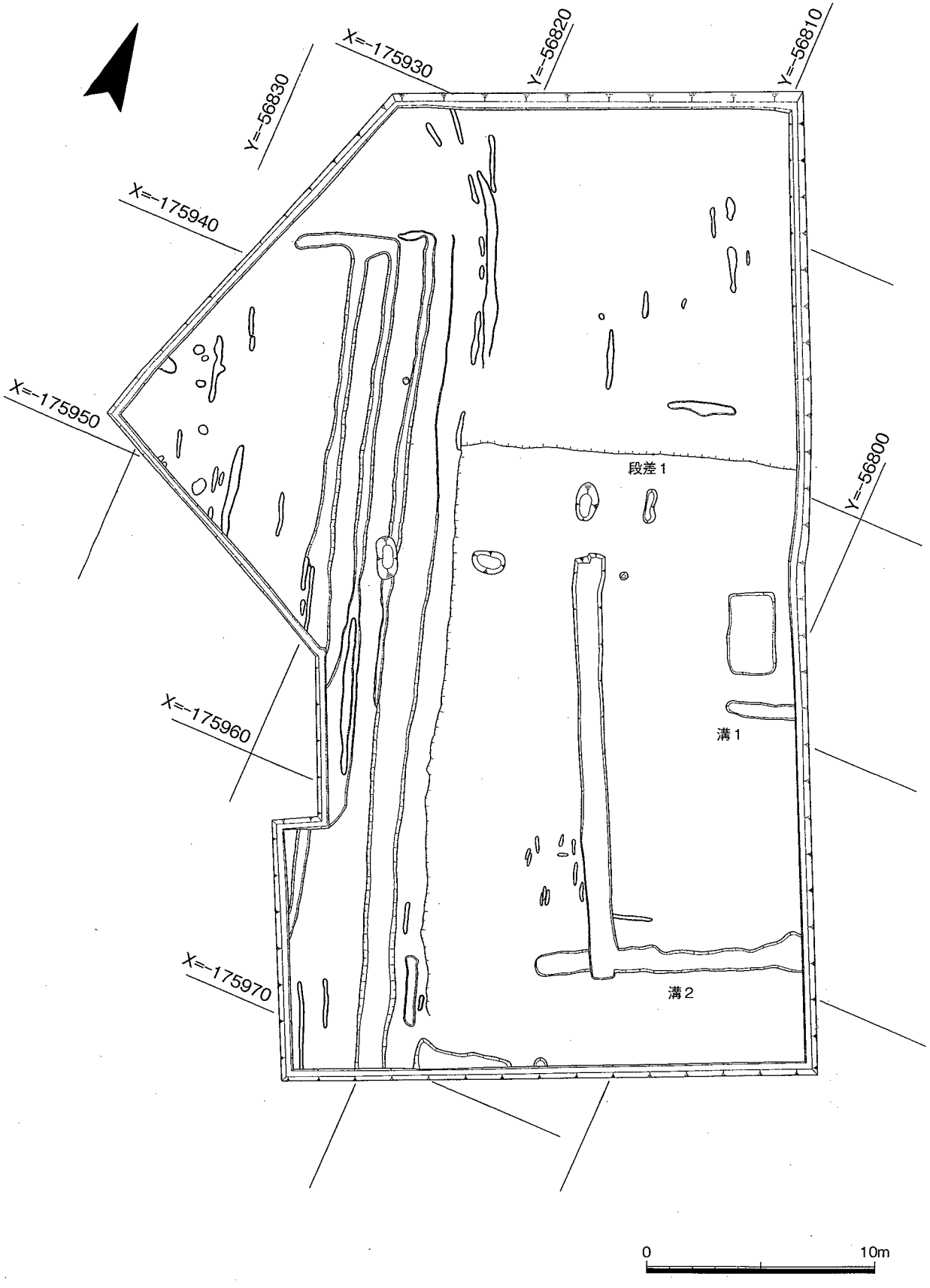


図5　遺構配置図（第6層上面）

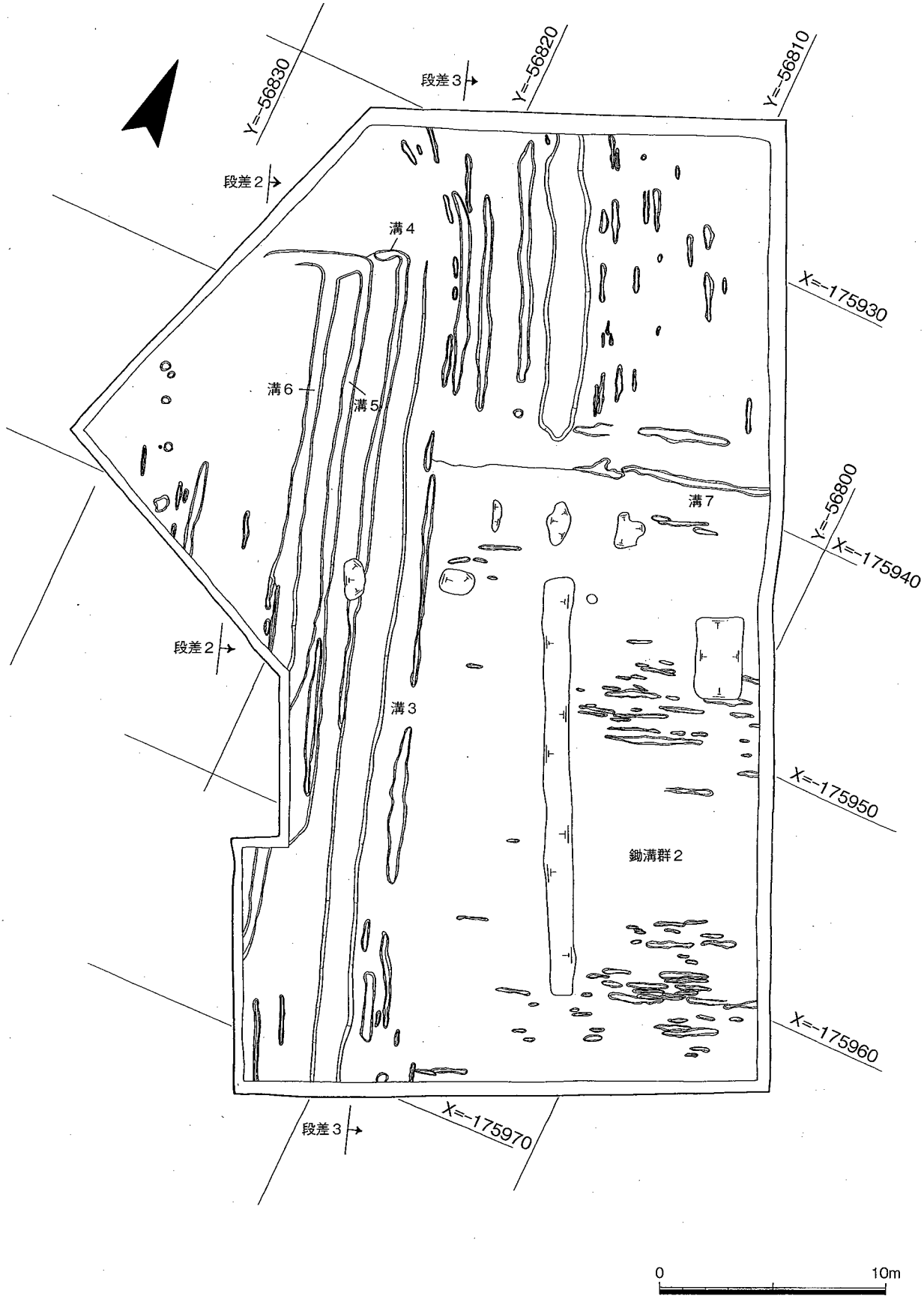


図６　遺構配置図（第５層上面）

第５層上面

段差２

G-6･7、H-4～6区にて検出した。調査区西側の水間街道に沿う形で段差がある。地形改変により平坦面を造成している。

段差３

段差２の東側の段差である。段差２と同様、水間街道に沿う形で段差が造成されている。地形改変により平坦面を造成し、耕作地としている。段上には溝３を掘削し、耕作に伴う溝を設けている。

溝３

調査区西の段差３西側段上部分の溝である。幅1.2～1.7 m、検出長36.8 m、深さ0.15 mで溝の方向は南南西－北北東方向である。埋土は、にぶい黄色土(2.5Y6/4)で耕作に伴う溝と考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土している。出土遺物、地層堆積状況から判断して中世以降に段差がつくられ、本溝が掘削されたと考えられる。

溝４～溝６

調査区西の段差３西側段上部分の溝である。南南東－北北西方向に平行する３条の溝で、幅0.5～0.8 m、検出長21～26 m、深さ0.05～0.1 mである。耕作に伴う溝と考えられ、北側でＬ字状に曲がることから段の北側に段差あるいは区画があったと考えられる。遺物は土師器、瓦器が出土している。掘削の時期は溝１と同様、中世以降に段差がつくられてからと考えられる。

溝７

本溝はC-4、D-4･5区にて検出した。段差１の上層で検出した溝で、溝の方向は東北東－西南西で、幅0.1～0.4 m、検出長6.4 mである。耕作地を区画する溝あるいは段差部分に掘削された溝と考えられる。遺物は、土師器、瓦器が出土しており、中世以降に地形改変が行われたと考えられる。

鋤溝群１

Ｄ～Ｇ－２～４区にて検出した鋤溝である。溝の方向は南南東－北北西方向のものが多く、幅0.1～0.3 m、検出長は0.3～10.7 mである。埋土はにぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）で、土師器、瓦器が出土している。地層堆積状況、出土遺物から判断して、中世の地形改変後に耕作が行われたと考えられる。

鋤溝群２

Ａ～Ｄ－６～10区にて検出した鋤溝である。溝の方向は東北東－西南西方向で幅0.1～0.2 m、検出長0.3～4.2 mである。埋土はにぶい黄色砂混じり土(2.5Y6/4)で、遺物は土師器、瓦器が出土している。地層堆積状況、出土遺物から判断して、中世の地形改変後に耕作が行われたと考えられる。

４.出土遺物

図化できた出土遺物のほとんどは遺物包含層第４層出土のものである。遺物包含層第３層、遺物包含層第５層のものについては説明文中に（）で示す。

１～12は土師器小皿である。１は復元口径7.3cmで口縁部はナデで仕上げる。２は復元口径7.4cmで、口縁部端部はつまみ上げナデで仕上げる。３は復元口径7.8cmで底部は平坦で口縁部はナデで仕上げる。４は復元口径8.2cmで、口縁部は斜め上方に立ち上がり口縁部をナデで仕上げる。５は復元口径8.4cmで口縁部をナデで仕上げる。６は復元口径8.6cmで口縁部をナデで仕上げる。７は復元口径9.0cmで、口縁部に強いナデを施す。８は復元口径9.2cmで、口縁部が斜め外方に立ち上がり、底部中央部の器壁が薄い。９は復元口径10.8cmで、

口径に比して口縁部の立ち上がりが低い。10 は復元口径 10.8cm で、底部から口縁部にかけての境がなく緩やかに立ち上がる。11 は復元口径 11.0cm で、底部から口縁部にかけて曲折し口縁部はナデで仕上げる。12 は復元口径 11.8cm で、底部は丸く指押さえ仕上げ、口縁部はナデで仕上げる。

14 ～ 21 は黒色土器椀である。出土した黒色土器のすべてが、内面の黒い黒色土器Ａ類で、第４層（14 ～ 20)、第５層（21）から出土しており、底部片がほとんどであるが小片が多く図化できたものは８点であった。14 は復元高台径 5.0cm で、高台断面は台形である。15 は復元高台径 6.4cm で、高台断面は逆三角形である。16 は復元高台径 7.2cm で、高台断面は逆三角形である。17 は復元高台径 7.7cm である。18 は復元高台径 8.4cm である。19 は復元高台径 8.4cm である。20 は復元高台径 8.8cm で、高台断面は逆三角形である。21 は復元口径 14.6cm で、内外面にミガキを施す。

22 ～ 26 は瓦器小皿である。22 は復元口径 8.1cm で、底部は平坦で口縁部はナデで仕上げる。23 は復元口径 9.0cm で、内面にミガキを施す。

24 ～ 36 は瓦器椀である。24 は復元口径 10.6cm で、内面にミガキを施す。25 は復元口径 11.2cm で、口縁部

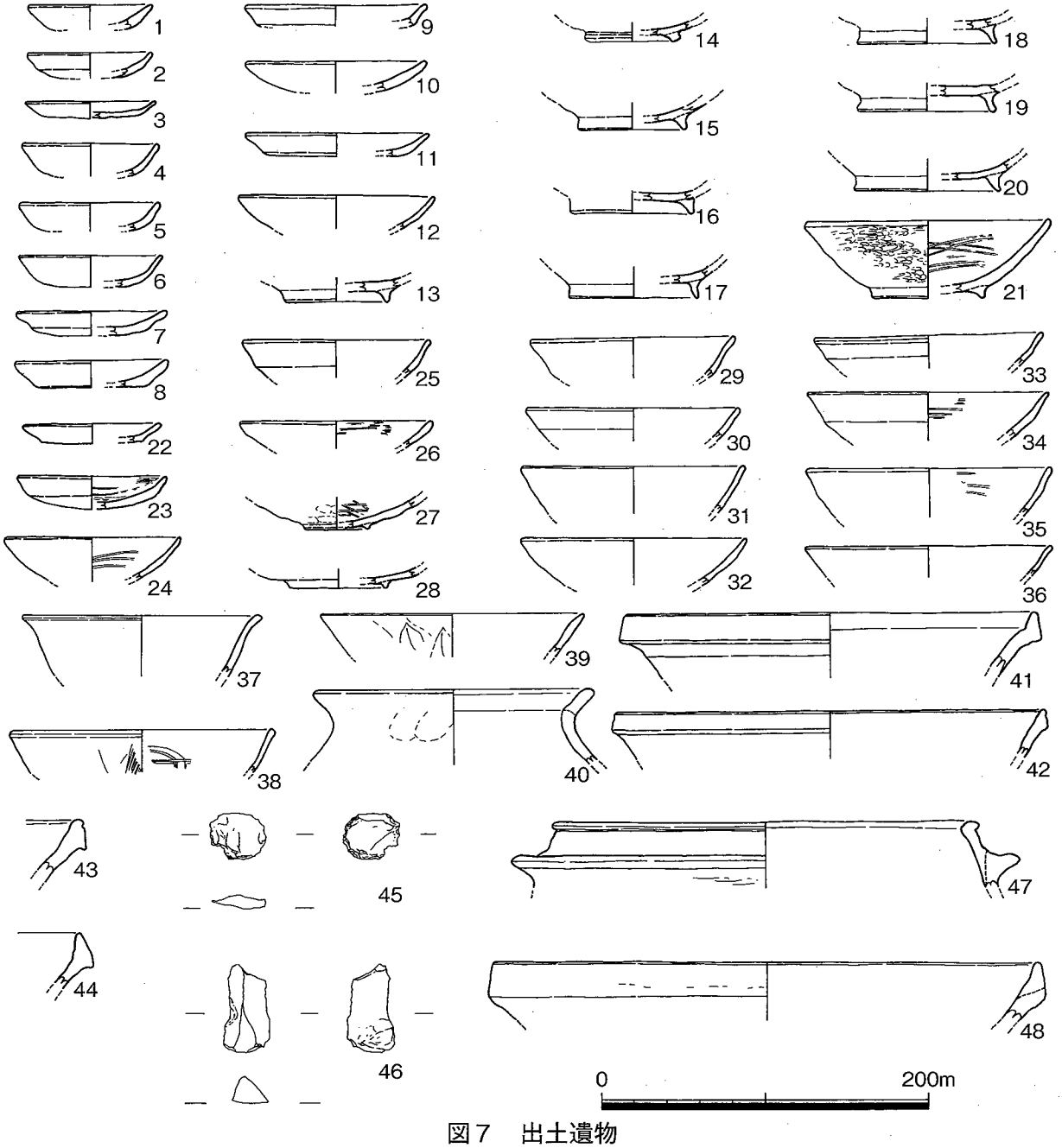


図７　出土遺物

はナデで仕上げる。26 は復元口径 11.6cm で内面にミガキを施す。27（遺物包含層第５層）は復元高台径 3.8cm で、高台断面は逆三角形である。外面底部を指押さえで仕上げ、内面にミガキを施す。28 は復元高台径 5.8cm で、高台断面は逆三角形である。29 は復元口径 12.2cm である。30 は復元口径 13.0cm である。31 は復元口径 13.4cm である。32 は復元口径 13.6cm である。33 は復元口径 13.8cm で、口縁部をナデで仕上げる。34 は SD-5157 出土で復元口径 14.6cm である。内面にミガキを施す。35 は復元口径 14.6cm で、内面にミガキを施す。36 は復元高径 14.8cm である。

37 ～ 39 は青磁碗である。37（遺物包含層第３層）は口縁部が端反りで、復元口径 14.4cm である。38 は復元口径 15.8cm で内外面に工具で文様を描く。39 は復元口径 15.8cm で外面に鎬蓮華文を施す。

40 は土師質壺である。頸部は、くの字に曲折し、外面は指押さえ、内面はナデで仕上げる。41、42、48 は瓦質こね鉢である。41（遺物包含層第５層）は復元口径 24.8cm である。42 は、復元口径 26.0cm である。口縁部は断面三角形である。48（遺物包含層第３層）は復元口径 33.0cm で、口縁部断面は三角形である。43、44 は須恵質こね鉢である。ともに遺物包含層第４層出土で、小片のため口径不明である。47 は SD-5157 出土で、復元口径 24.8cm の土師質羽釜である。45、46 はサヌカイト石器剝片である。

第４章　ま　と　め

本遺跡のこれまでの調査成果では、中世の遺物が出土し、遺構を検出しており、中世に集落が営まれ、耕作が行われていたことが明らかとなっている。今回の調査では、平安時代の土器である黒色土器が出土し、周辺遺跡の調査においても、森下代遺跡で緑釉陶器が出土し、山間部になるが三ヶ山オニ谷遺跡で黒色土器が出土しており、本遺跡および周辺部において平安時代に集落があったことが推定できる。

本調査地の地形は、西側を通る水間街道から東側に向かって傾斜し、約 100 m離れたあたりから東山に向かって上る。緩やかな谷となっており、第５層（5 褐色土）、第６層（6 灰黄褐色土）は谷部の堆積土と考えられる。谷は水間街道と並行する方向で南から北方向に緩やかな傾斜をもち、灌漑用水路も地形に沿う形で掘削されたと考えられる。

これまでの市内の発掘調査で、中世期に地形改変等により開墾がすすみ耕作地が拡大したことが明らかになっているが、本調査地においても同様に傾斜地に地形改変を行い、平坦面をつくり、灌漑水路（溝）を掘削して耕作地としていると推定される。

本調査地の土地利用の変遷は、平安時代は、東側の平坦面が耕作地として利用され、中世には西側傾斜部分において地形改変（段差２、段差３）が行われ、平坦面が造成され、灌漑水路も掘削された。近世～近代にかけて水間街道側から盛土を行って耕作地を造成し、東西方向の段差の土地が盛土による造成により改変され、南北方向に段差が設けられ２区画となっている。本調査地は、現在木島小学校が斜め向かいにあり、住宅も道沿いに密集して見られるが、明治期の地図を見てみると三ツ松村と森村の間で耕作地が広がっており、現在の景観は昭和以降のことと考えられる。

現在の三ツ松、森は集落が密集しており、密集している部分で大規模な開発が行われることは少なく、個人住宅の建設、建替えに伴う発掘調査が多く、調査面積は狭小である。本遺跡（三ツ松垣外遺跡）については、本格的な調査ははじめてであった。

調査成果で特に注目すべき点は、平安時代後期の黒色土器が出土したことで、黒色土器が出土している三ヶ山オニ谷遺跡や同時代の緑釉陶器が出土した森下代遺跡などとの関係についても、検討していく必要がある。

報告書抄録	
ふりがな	みつまつきたがいといせきはっくつちょうさがいよう
書名	三ツ松北垣外遺跡発掘調査概要
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第73集
編著者名	三浦基
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597-8585　大阪府貝塚市畠中1-17-1　TEL 072-423-2151
発行年月日	西暦2007年9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みつまつきたがいといせき 三ツ松北垣内遺跡	おおさかふかいづかし 大阪府貝塚市 みつまつ 三ツ松	27208	84	34度 26分 44秒	135度 22分 54秒	2006 1101～ 2006 0127	1034	高齢者 福祉施設

ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みつまつきたがいといせき 三ツ松北垣内遺跡	集落跡	平安時代 中世	溝 鋤溝	土師器 黒色土器 瓦器	

図　　版

図版1　検出遺構

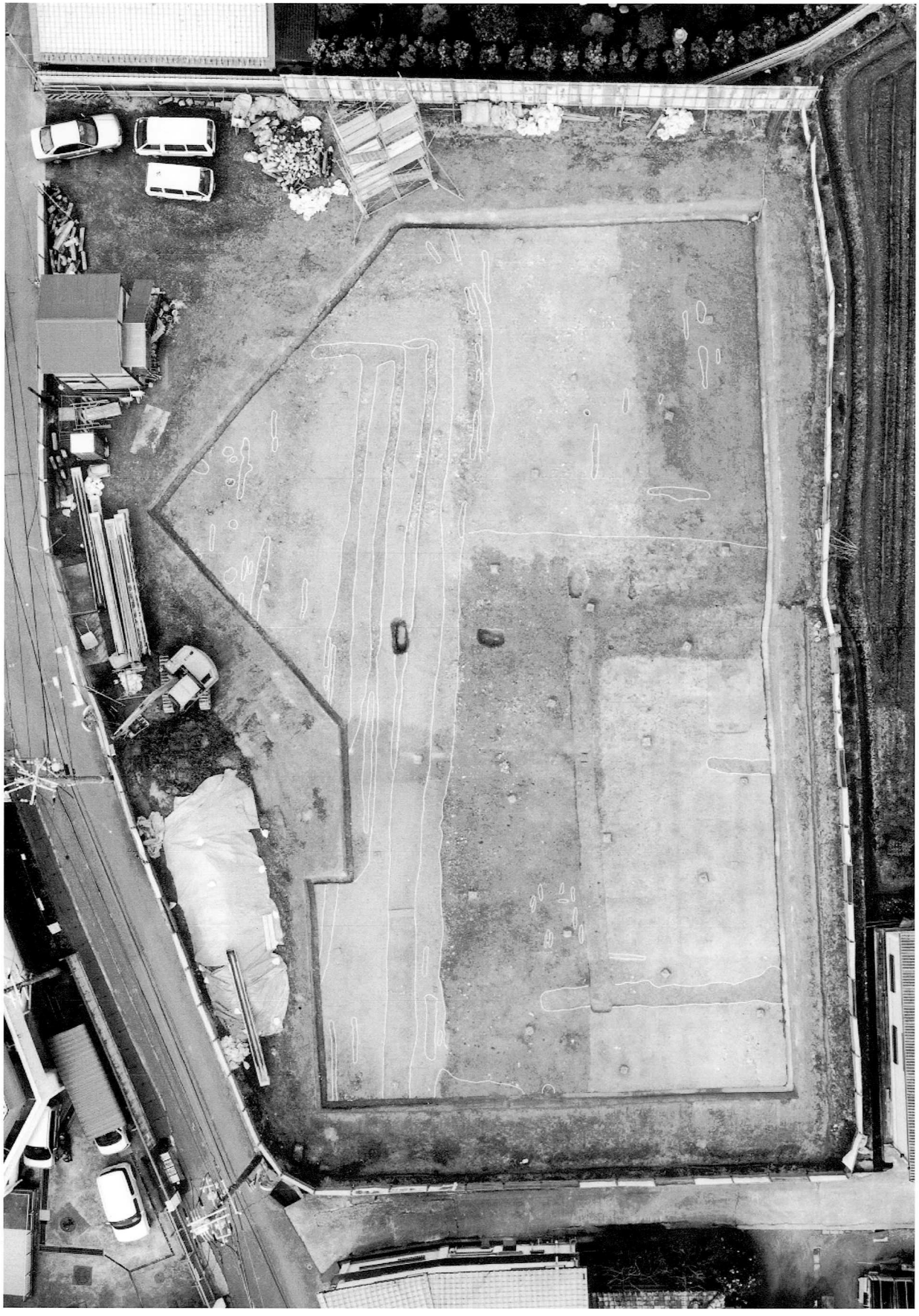
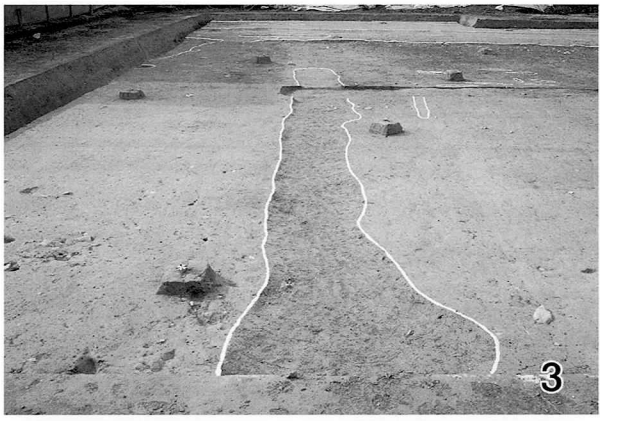
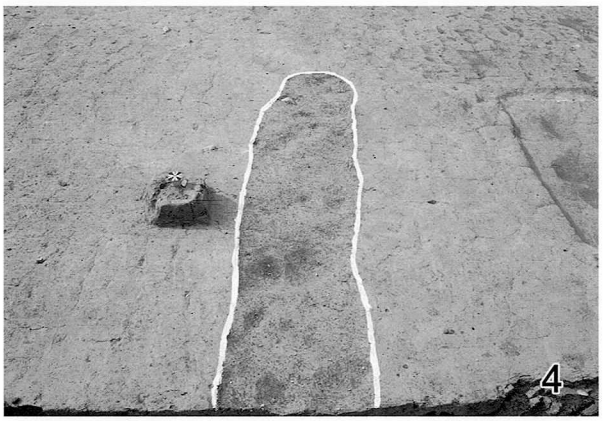
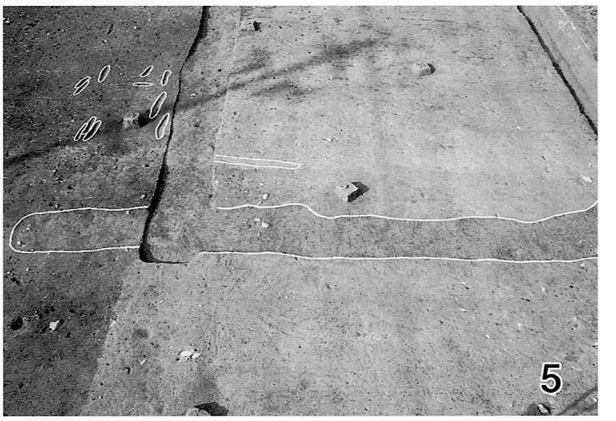


写真1　調査区全景

図版2　検出遺構







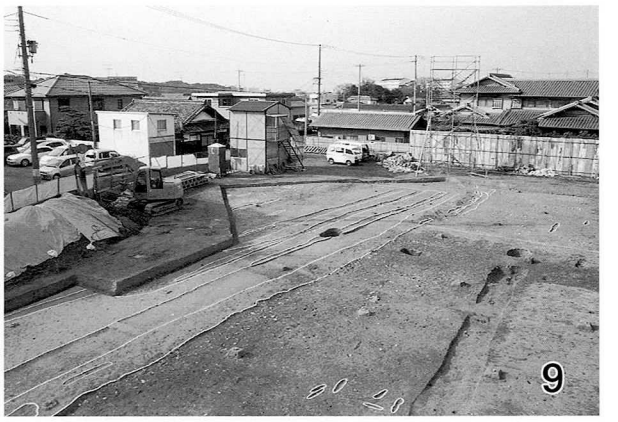
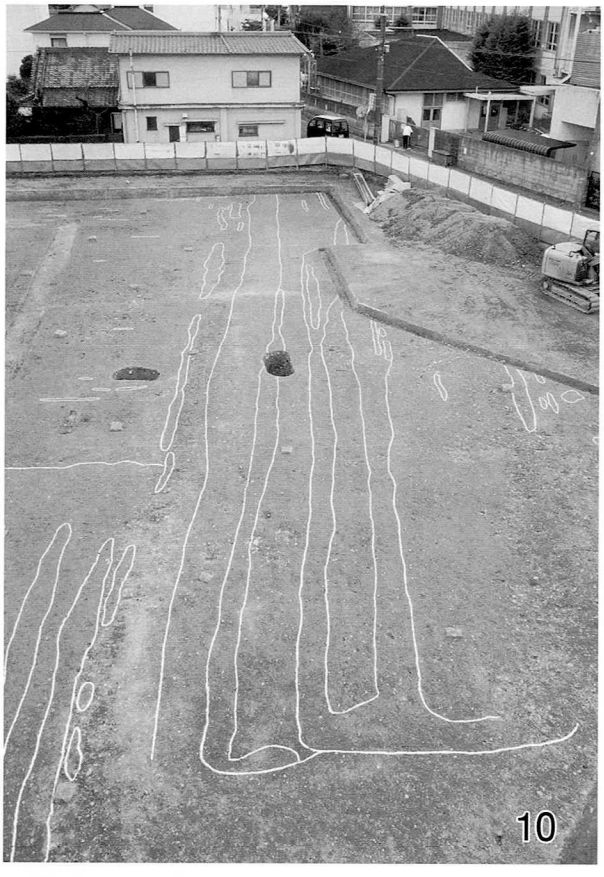
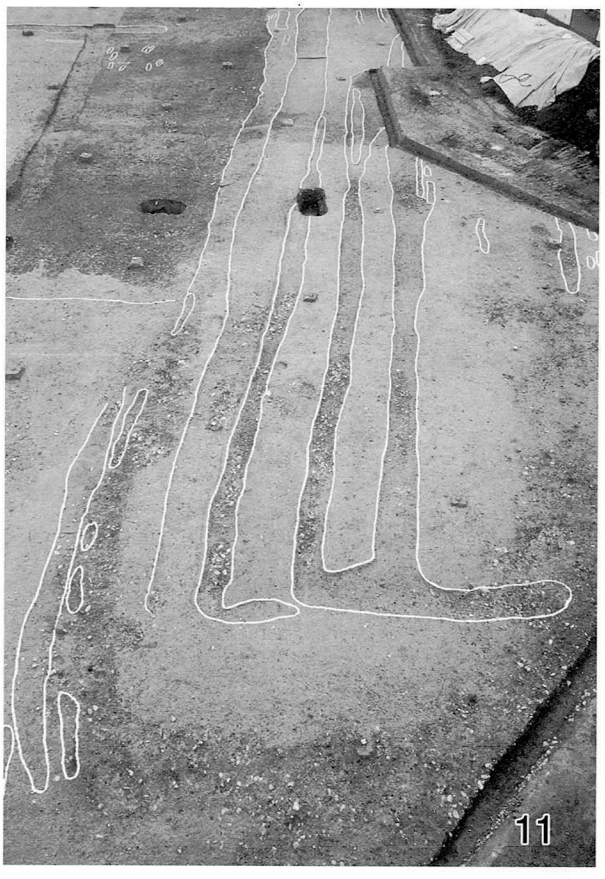


写真2・3・5　溝1、写真4　溝2、写真6・7　調査区南側
写真8　溝7・鋤溝群1、写真9　調査区西側

図版3　検出遺構





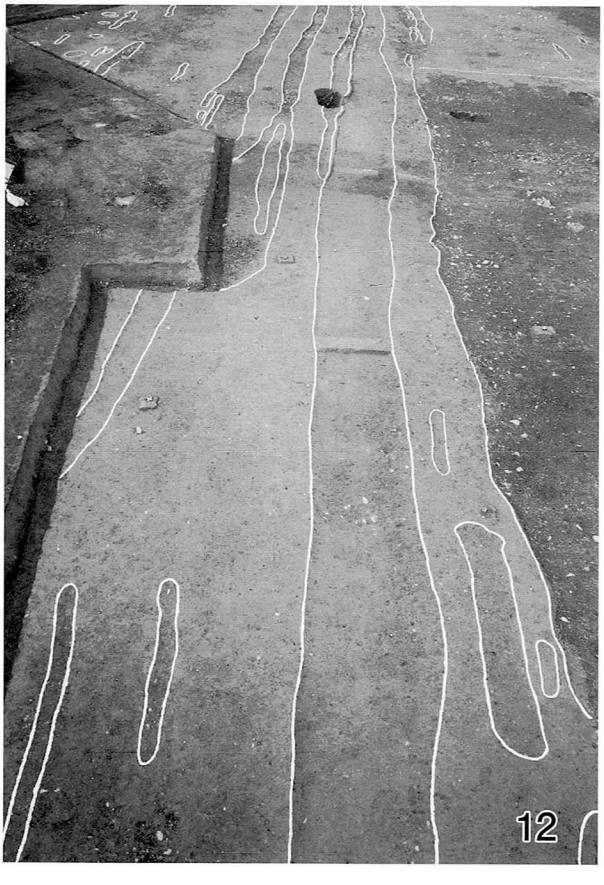
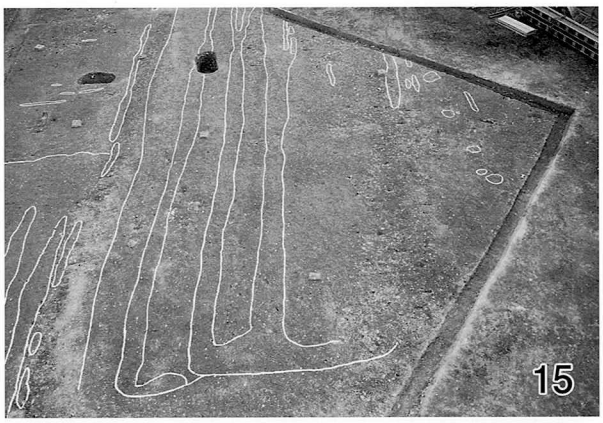
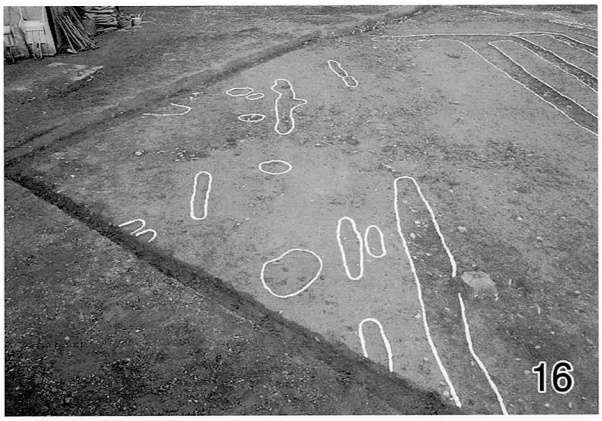
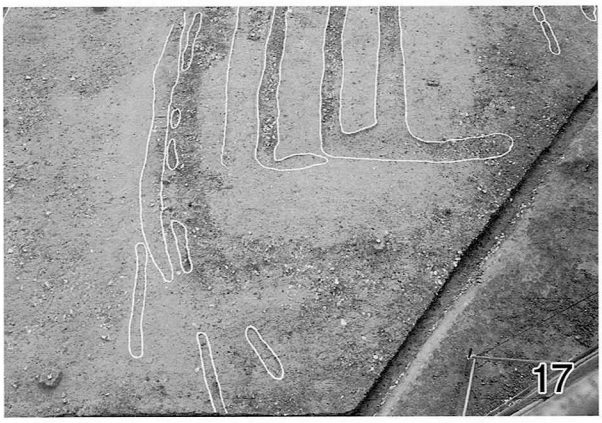


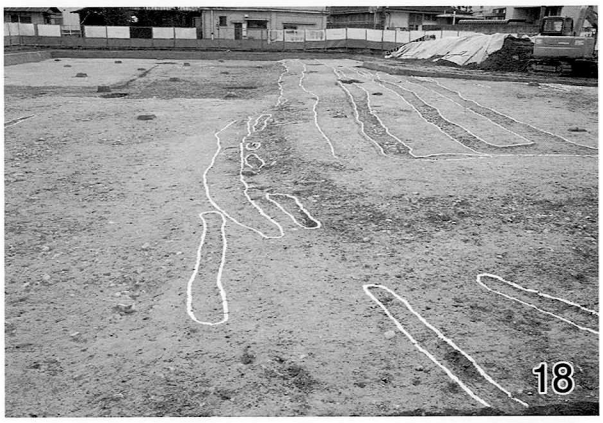
写真 10·11·13　溝4～6、写真 12·14　溝3、段差3

図版4　検出遺構









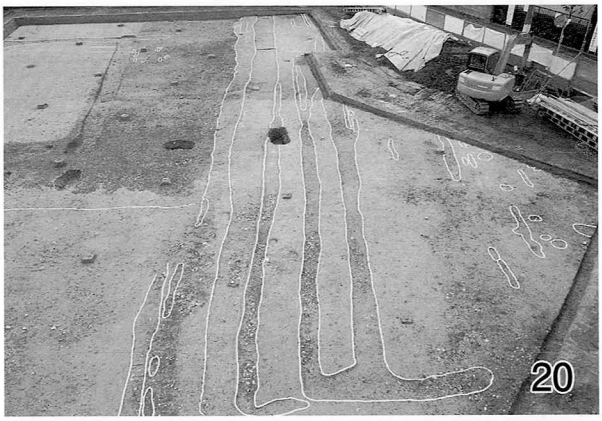
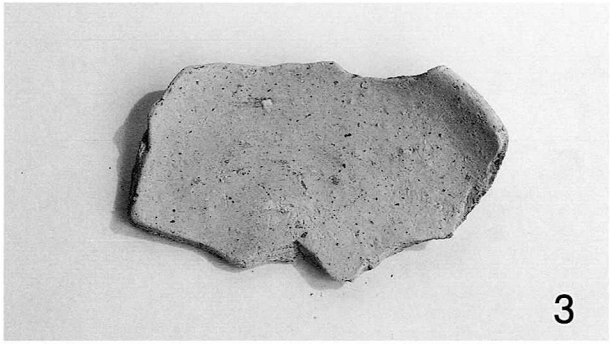
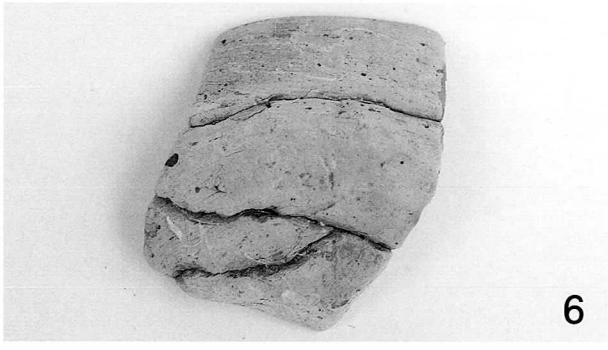


写真 15·16　段差２、写真 17 ～ 20　段差３、写真 21·22　鋤溝群２

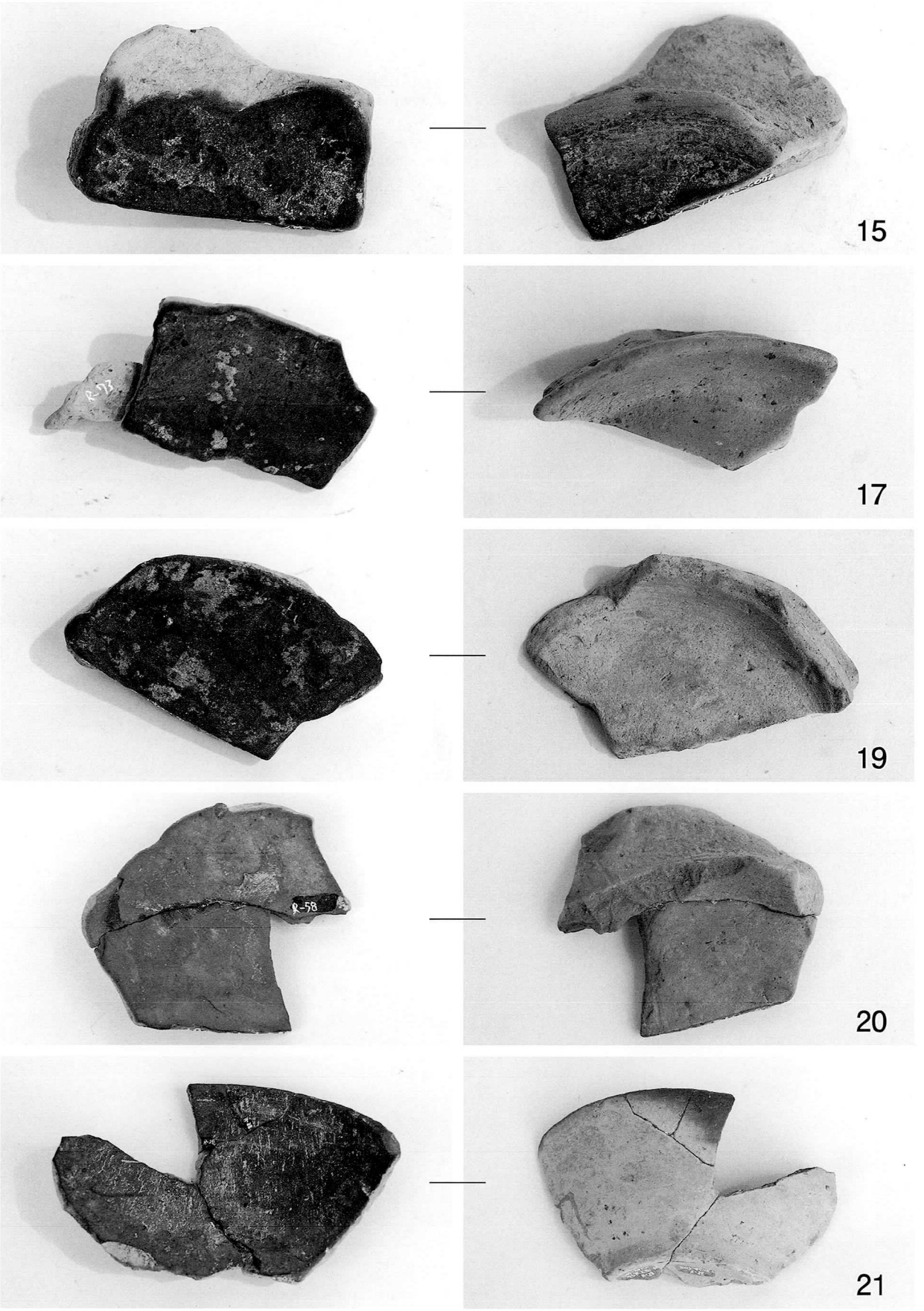
図版5　出土遺物





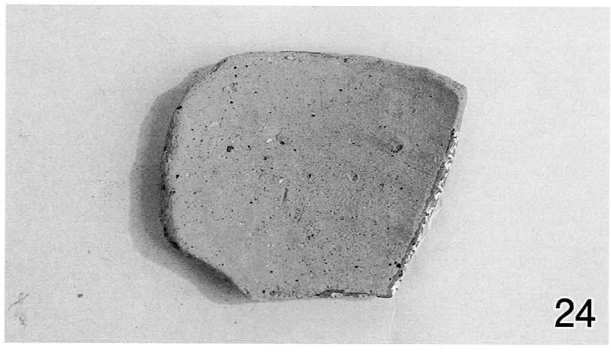
遺物包含層第４層出土土器

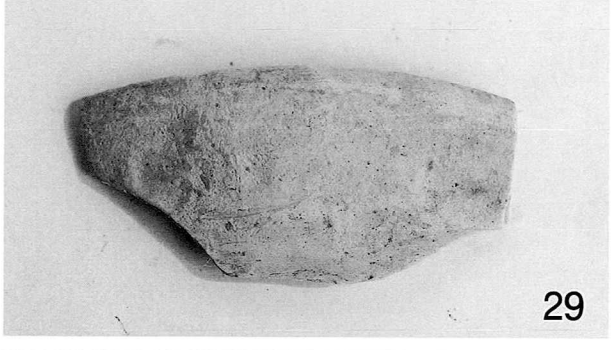
図版6　出土遺物

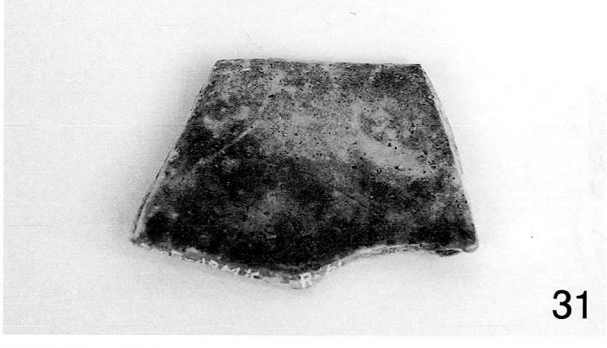


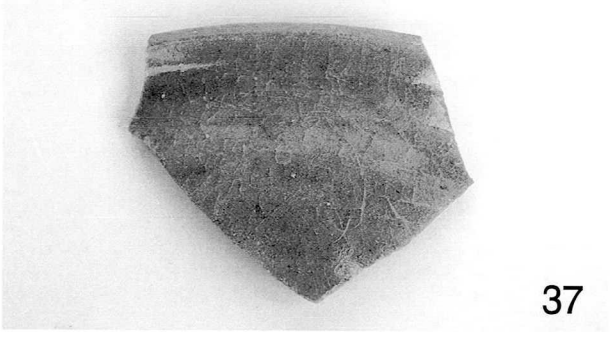
遺物包含層第５層（21）、遺物包含層第４層（15·17·19·20）出土黒色土器

図版7　出土遺物



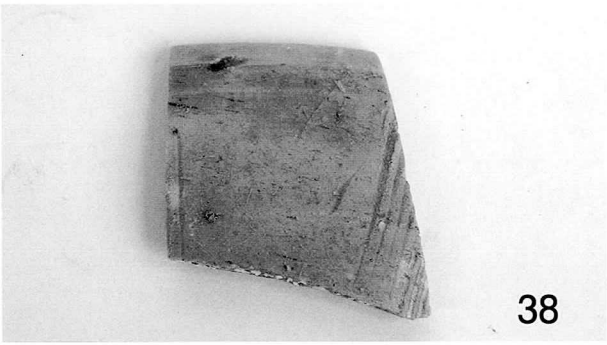


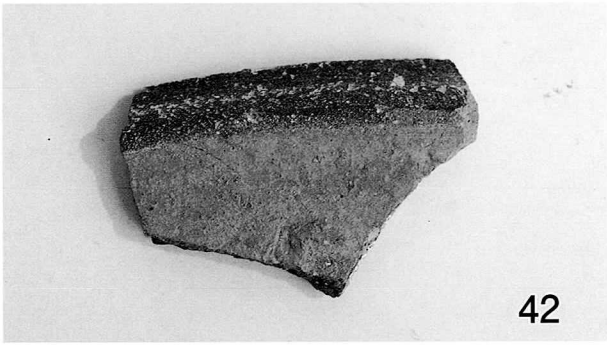


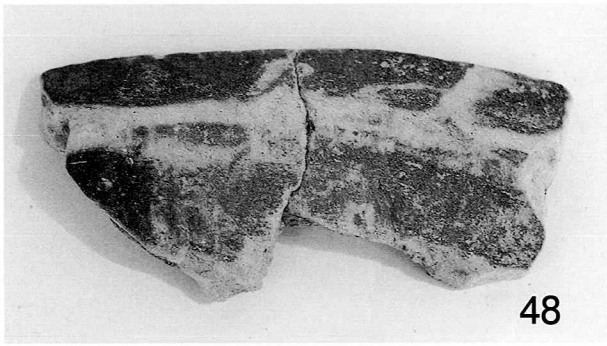


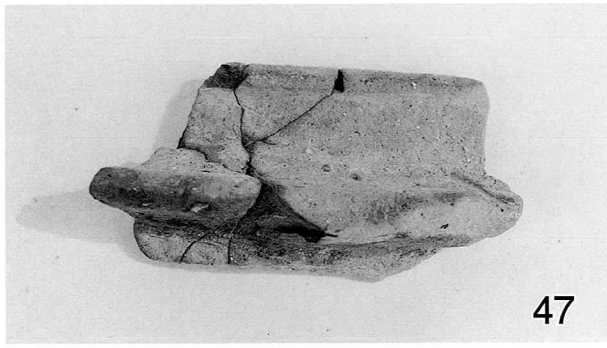
遺物包含層第４層（23·24·27 ～ 29·31·32·34）、遺物包含層第３層（37）出土土器

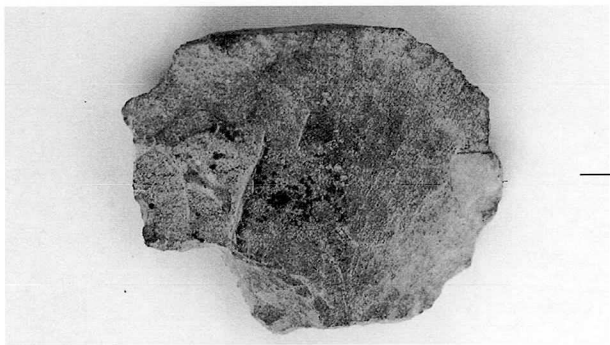
図版8　出土遺物

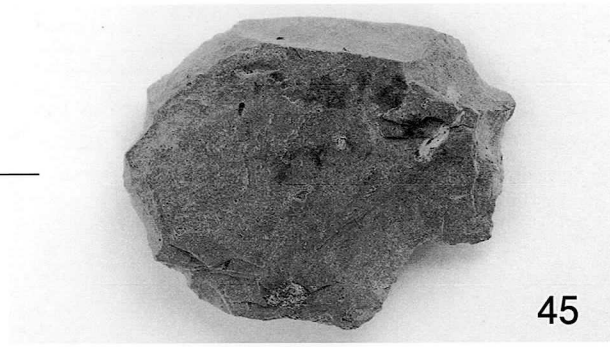


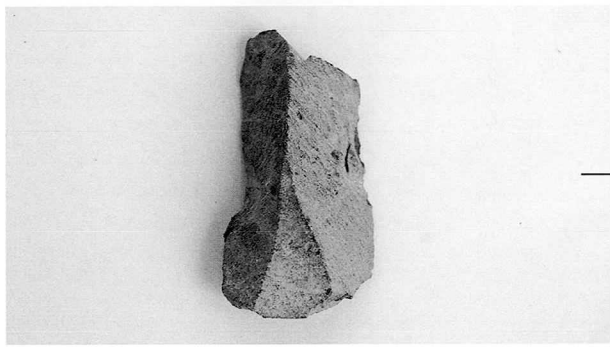


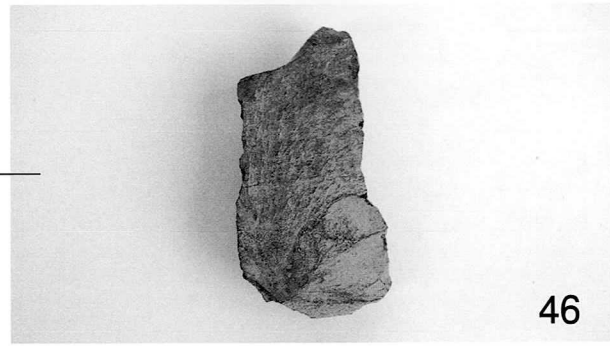












遺物包含層第５層（41）、遺物包含層第４層（38·42·44 ～ 47）、
遺物包含層第３層（48）出土遺物

貝塚市埋蔵文化財発掘調査報告　第73集

三ツ松北垣外遺跡発掘調査概要

発　行　日　　平成19年（2007）9月30日
編集・発行　　貝塚市教育委員会
　　大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号
印　　刷　　摂河泉文庫